

## 『日本の誇り-多くのユダヤ人を命懸けで救ったサムライ達-』

反ユダヤ主義はヨーロッパの長い歴史を通じ、キリスト教徒達の中に拭い去れない存在として心に残っていた。特にドイツは（次の講義で説明）ユダヤ人種を敵と見なし、圧迫を強めた。そしてユダヤ人を国内から追放し、ある理由（水晶の夜）から隔離政策をとり、ゲットー（ヨーロッパ諸都市内でユダヤ人が強制的に住まわされた居住地区。第二次世界大戦時、東欧諸国に侵攻したナチス・ドイツがユダヤ人絶滅を策して設けた強制収容所もこう呼ばれる）でのホロコースト（大量虐殺）へと進む。ドイツだけでなくポーランドやソ連の多数のユダヤ人も迫害を受けた。この様な背景の中で、ゲットー入りを恐れた人々はナチスから逃れようとしたが、難民となったユダヤ人は、世界的な差別感情もあり、受け入れが制限されていた。



ゲットー。ドイツ語で「ユダヤ人居留区、入るべからず」の看板。

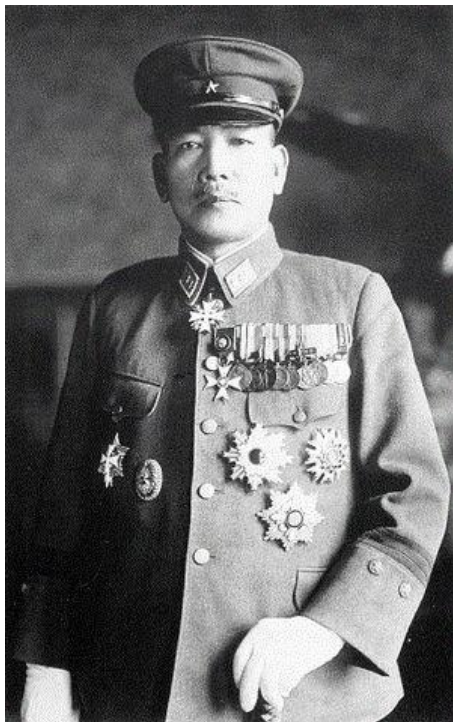
日本も日独伊三国同盟を直前に控えた時期で神経を使い、入国ビザ発行も制限せざるを得ない状態であった。各国の日本大使館にも日本への渡航ビザを発給しないように通達されていた。このような厳しい状況の中での救出劇であった背景を理解して、その活動に携わった代表的な人々を知って欲しい。

### 樋口季一郎陸軍少将（ひぐちきいちろう）

陸軍大学校でロシア語を習得、フランス語も堪能。ハルピン特務機関長、ポーランド公使館附武官。日本で最初のユダヤ人の救出、保護の道を開く。ユダヤ老人の「日本の天皇こそ我らの待望するメシアではないかと思う」の思いに応える

という樋口の精神と行動が、杉原、安江大佐、犬塚大佐に影響を与えたと言われている。

昭和11年8月、ジュネーブで開かれた第一回「ユダヤ人の生存権を確保する為の全世界のユダヤ人の共同機関結成」大会の後、ハルピンでの大会開催に関して、樋口は「可能な限り援助を惜しまぬ」と快諾。ユダヤ難民に理解を示した大会祝辞に会場全員割れんばかりの拍手を受ける。涙する者もあった。ハルピン特務機関として、吹雪のソ連領オトポールにて立ち往生していた、ナチスのユダヤ狩りから逃れてきた約2万人のユダヤ難民の救出に尽力した。その後、ユダヤ難民救出の「樋口ルート」を拓く。後、中將として、ソ連軍が不法にも占守島（しむしゅとう）を攻撃して来たが（昭和20年8月18日）、帝国陸軍最後の戦闘に勝利し、31日に停戦となる。武人としても立派な戦歴を残している。



樋口 季一郎

### 安江仙弘陸軍大佐（やすえのりひろ）

大連特務機関長。陸軍随一のユダヤ問題研究家。板垣陸軍大臣を動かし、「五相会議（昭和前期に、内閣総理大臣・陸軍大臣・海軍大臣・大蔵大臣・外務大臣の5閣僚によって開催された会議）」で「ユダヤ人対策要綱」策定させる。これは皇道精神が発露された対ユ方針である。約一万人を救う彼の思想は「八紘一宇の大精神で全てに向かわねばならない。ドイツの尻馬に乗って日本がユダヤ人

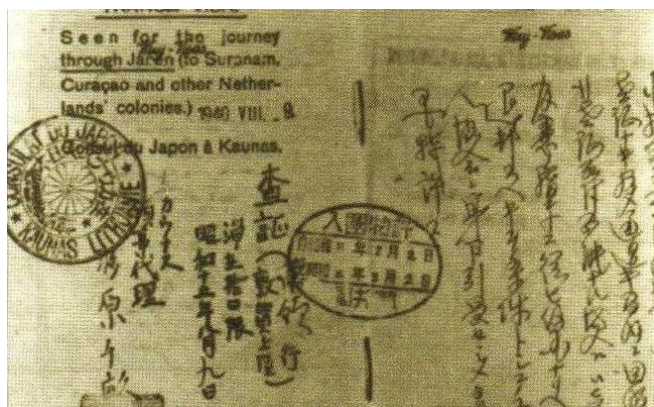
排斥をやらねばならない理由などどこにもない。」というものであった。残念ながら、彼はソ連軍の不法抑留を予期しながらも身を隠すことなく従容たる態度で対処し、シベリアのハバロフスク収容所で昭和25年に病死した。彼を死に追いやったソ連は反ユダヤ主義国家であった。安江機関は犬塚海軍大佐率いる犬塚機関と協力し、ユダヤ難民保護に尽力した。



安江 仙弘

### 杉原千畝 (すぎはらちうね)

カナウス領事代理。6千人に命のビザ発給。日独伊三国同盟締結の直前であり、常識的には日本政府はユダヤ人には関わりたくない状況の中で、杉原は外務省の訓令を乗り越えて、免職をも覚悟してビザを発給した。



杉原の発給した査証 (ビザ)

彼は国際列車でベルリンに向かう列車が走り出すまで、窓から身を乗り出して許可書を書き続けた。戦後、ユダヤ人が彼を捜し出し、イスラエル国として感謝の念を述べ、どうしても知りたかった、「何故自分の身の危険を冒してまでユダヤ人を助けたのか」問うた。杉原の答えは次のようなものだった。「それは私が外務省に仕える役人であっただけでなく、天皇陛下に仕える一臣民であったからです。悲鳴をあげるユダヤ難民の前で私が考えたことは、「もしここに陛下がいらっしゃったどうなさるか？」ということでした。陛下は目の前のユダヤ人を見殺しになされるだろうか？それとも温情を掛けられるだろうか？そう考えると結果ははっきりしてました。私のすべきことは、陛下がなさったであろうことをする事だけでした。もし外務省に訓令違反を咎められたら、私の破ったのは訓令であって、日本の道德律ではないと思えば良いと腹を決めたのです・・・と。杉原はただの人道主義者ではなかった。勇気ある国士でもあった。

晩年、杉原はイスラエルのヤド・ヴァシェム（ナチス・ドイツによるユダヤ人大虐殺の犠牲者達を追悼するためとユダヤ人を救った異邦人を称えるためのイスラエルの国立記念館）に招かれ、「諸国民の中の正義の人賞」を贈られた。この記念館には「記憶せよ忘れるなかれ」と書かれている。杉原がカナウスを離れる時、駅でユダヤ人達が、「私たちは忘れません。もう一度あなたにお会いします」と叫んだ。戦後、この約束は果たされた。



杉原 千畝

### 犬塚惟重海軍大佐（いぬづかこれしげ）

藤原鎌足の子孫。夫人（旧姓 神明きよ子）は婦人記者としてユダヤ問題に関心を持ち、犬塚大佐と上海で知り合い結婚。秘書的活動をするようになる。海軍兵学校39期。海軍大学校でフランス語を学ぶ。海軍のユダヤ研究の第一人者で

ある。安江陸軍大佐と共にユダヤ難民救出を行う。彼の大作「ユダヤ問題と日本」(内外書房)は有名。

上海に犬塚機関を創設し、ユダヤ難民保護に尽力。上海にユダヤ難民区を設立する構想をもち、奔走する。当時、上海現地ユダヤ富豪の救済金も先細りになり打開策もなかった。そこで犬塚は田村光三の活動(田村工作)を介し、ユダヤ難民に満州国か支那の一部をユダヤ特別区として開放し、移住する案をもって活動したが、日独伊三国同盟の成立が原因で、米国ユダヤ協会議長のラビ(ユダヤ教の聖職者。原義は〈大きい〉を意味するヘブライ語から派生した〈私の主人〉という呼びかけ)であるステファン・ワイズ等の反対によって成功しなかった。

注) 河豚計画

1930年代に日本で進められた、ユダヤ難民の移住計画である。1934年に鮎川義介が提唱した計画が始まるとされ、1938年の五相会議で政府の方針として定まった。実務面では、陸軍大佐安江仙弘、海軍大佐犬塚惟重らが主導した。ヨーロッパでの迫害から逃れたユダヤ人を満州国に招き入れ、自治区を建設する計画。

しかし、樋口、安江、杉原等によって助けられたユダヤ難民は神戸から上海に流入し、そこで留まるか、各国に保護された。犬塚機関は反ユダヤ主義運動家でキリスト教徒である陸軍中将四王天延孝から狙われ、種々の陰謀によって流されたデマによって、彼や犬塚機関はいろいろな迫害や誤解を受けた。が、犬塚が上海で難民保護に尽くした実績は大きい。戦後、当時上海に生活していたユダヤ人達は、ナチス・ドイツによる虐殺とそれを看過したキリスト教の国々の実態を知り、ナチス・ドイツと同盟下にありながらも、ユダヤ人「保護」政策を取った日本に驚きに似た感謝の念を示している。ヒルダ・ラパウという女性は、日本の占領者がユダヤ人の為に安全な地を確保してくれた、、、と、深い感謝の気持ちを表す詩を作っている。彼女の気持ちは多くの共感を呼んだ。

近頃、上海のことを見聞きするにつけ 私は神に祈る  
 しかるべき人々に称賛が与えられますように  
 彼等が新たに誇りを持てますように  
 その人達は上海のナチが振るおうとしていた  
 恐ろしい暴力から、私たちを守ってくれました  
 救助者が誰だったか? 暴くのは簡単なはず  
 今では誰もが知っている その正体は日本人  
 憎しみばかりが広まっていた時 彼等はユダヤ人に親切だった

みなさん あの悲劇で六百万人が消えた道を 私たちは逃れたのです  
異国にあつて 私達は自由だった  
中国人と肩を並べて働いた者も居ました  
苦しみもありましたとも 愛する人を失って  
それでもなお、私達は糊のようにしっかり団結してました  
収容所のことで不満を言う人は居ますが  
皆殺しになった人を思えば上海は楽園でした  
そう ただちょっと湿気が多かったことさえ忘れていれば

上海が受け入れた人数は2万5千人を超え、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカに逃げたユダヤ人の数より多い。全面的にユダヤ人を排斥するが如きは八紘一宇の我が国是に副わざるもの・・・日本人がユダヤ人を救った中心を成す思想であった。「自由」、その後「諸君」、「正論」等の雑誌で紹介され、自由社の「ユダヤ人を保護した帝国海軍」で真実が広がった。これは戦後の知識人に大きな感銘を与えた。

戦後、ユダヤ人を救った官僚は日本でも顕彰されたが、武官は不幸にも全く評価されず、不遇な生活を送った人が多い。陸海軍省なき戦後、彼等を顕彰する役所がなかったのが大きな原因であろうか？



犬塚 惟重



### 根井三郎（ねいさぶろう）

ウラジオストック日本領事館総領事代理。「杉原が発給したビザを認容するな」の訓電を本省から受ける。ドイツへの配慮からである。彼は公館が発給したビザには日本の威信がかかっている、これを無効にすれば日本は国際的信用を失う・・・と命令を拒否し、自らの判断で日本に向かう船に乗せた（訓令に違反すれば外交官としての将来を失う）。彼はこの損得よりも、人として大切な武士道を選択したのである。

根井の決断によって、ユダヤ人達は敦賀や神戸で地元の人達に温かく迎えられた。もし根井が、ドイツの圧力に配慮した本省の訓令に従い日本への渡航ビザを認めなかったら、途中、ソ連の秘密警察が乗り込んで金品を奪われたり、強制連行されたりする恐怖に戦き（おののき）ながら、はるばるシベリア鉄道に乗り、やっとの思いでウラジオストックにまで到着した彼等は、ナチスが待ち構えるヨーロッパに逆戻りさせられ、ガス室に送られる運命を辿ったであろう。誠に命のリレーであった。誠の武士道を貫いた根井の功績は最大の賞賛に値する。



根井 三郎

### 小辻節三（こつじせつぞう）

ペンネーム朝比奈四郎。神戸で滞留していたユダヤ難民の援助活動をした。京都の加茂御祖神社（下鴨神社）の社家（しゃげ 代々神社の神職を世襲してきた家）の出身。明治学院大学神学部卒業。昭和2年、米国へ留学し、旧約聖書の研究で博士号修得。ユダヤ文明にも通じた。昭和6年帰国後、聖書原典研究所長を務め、ヘブライ語を研究。国際政経学会の「国際秘密力の研究」誌上に上記のペ

ンネームでユダヤ問題の解説を執筆する。昭和13年、小辻は満鉄総裁松岡洋右に請われ、満鉄調査部の顧問となる。当時、満州にはナチス・ドイツやソ連による迫害から逃れて来たユダヤ人が多数生活していたので、ユダヤ人の「力」を活用したい松岡のパイプ役として大いに活躍した。同年、第2回極東ユダヤ大会に於いて小辻は満鉄代表として、得意のヘブライ語でユダヤ人を励まし、勇気付ける内容の祝辞を述べた。ヘブライ語を流暢に話す日本人の激励のスピーチに感動し、全員が立ち上がって拍手喝采を送った。このニュースは世界に広がり、新聞にも掲載され、ユダヤ人に絶大なる信頼を得るようになった。これが原因で憲兵より問題視され、内地に帰ることになる。

杉原→根井と命のビザを繋いで敦賀や神戸に辿り着いたユダヤ人達の前に難事が待っていた。それは僅か10日間の日本での滞在期限である。10日の滞在が過ぎれば強制送還される故、受け入れ先の家庭や国を急いで探さねばならないが、それは現実問題として困難なことであった。そこで窮地に陥ったユダヤ人が唯一の頼みとして小辻を選んだのは当然であったろう。ドイツの圧力で小辻にも危険が迫っていた。しかし、彼は政府や軍からの尋問や憲兵隊の暗殺リストに名前が載りながらも、我が身を省みず命懸けで奔走し、当局に掛け合い、彼等の希望に応えるべく、上陸許可、滞在期間延長許可、渡航先探しに、借金や募金集めもしながら献身的尽力をした。結果、ユダヤ人達は日本から無事海外に出国したのである。



ユダヤ難民を受け入れた神戸の人々

戦後の1959年、彼はイスラエルに渡り、アブラハムの名を付与されている。彼は大きな役割を果たし功績があるにもかかわらず、あまり日本では知られていない。百年以内に誰か自分を分かってくれる人が現れるだろう・・・と言い残



して1973年に他界した。彼の墓はエルサレムにあり、静かに平和を祈り、眠っている。



小辻 節三

### 結び

軍人、官僚、民間人で命のビザを繋いだサムライ達が我が身の危険や将来の生活に対する不安も顧みず、命令を無視し、救済へと突き動かした情熱はどこから生じたのだろうか。彼等に共通するのは、日本建国の理想である「八紘一宇」の精神（次回解説）であろうと思う。

当時のドイツとの同盟（共産主義のソ連の脅威を防ぐ為）が近いことから近視眼的ナショナリズムに固執する官僚が多い中で、杉原、根井や軍人である樋口、安江、大塚、民間人の小辻らサムライ達は世界を見据える全体観、大局観を持っていたと言えよう。当時の日本人は弱き者、敗者への仁、即ち「惻隱の情（そくいんのじょう）」という、武士道が古来から重んじて来た美徳を当然のものとして持っていたのだ。その美徳が、現実に関心した時、彼等を行動に掻き立てたのであろう。このような正義を行う勇気を我々も身に付けたいものである。日本人が伝統として受け継いで来た「武士道精神」や「八紘一宇の心情」は我々もDNAとして受け継がれていると信じる。それを覚醒させる為の奉仕を続けたいと思っている。美しい日本人の心を取り戻し、世界平和に寄与するために！！

平成26年11月9日  
志雲会代表 有馬 正能